

地域連携センター

NEWS

2012.07

tel 026-295-1325

fax 026-217-2846

chiiki@seisen-jc.ac.jp

地域と大学のパートナーシップ

地域連携センター長 小林敏枝

「地域連携活動」は「教育活動」「研究活動」と並ぶ、大学としての重要な使命のひとつです。

大学によって様々な連携の形があります。本学が大切に行っていることは、地域をフィールドに教育活動を展開することです。地域と大学は重要なパートナーであり、お互いの存在価値を高め合うことこそ地域づくりへの貢献です。その中心に「学生」の存在があり、学生ならではの感性とエネルギーを活かした地域活動を進めていくことです。

今年度、その視点を重視して、新たに千曲市と連携協定の締結を行いました。現在、セミナー等のフィールドワークやインターンシップ、研究調査等いくつかの連携プロジェクトが動いています。地域のニーズと本学の教育・研究活動のマッチングがスムーズに進んだ事例です。

地域連携センターの役割は、地域と良い関係を構築し、互いにとって良い関係があるのか明確にして進め、信頼関係のもとに双方の環境を整えることです。今までもいくつかの自治体・団体と

連携協定を結んでおり、実績をベースに新しい活動が展開できることを期待しています。

本学の地域連携活動は、国際交流機会の提供、市民向け講座・講演会の開催による生涯学習機会の提供、ボランティアなどの教育活動支援等多岐にわたっています。今後は、学内・外の情報の把握と発信事業を強化し、地域連携活動に関する総合的な窓口としての機能を一層充実させていきます。

「産学官連携パートナーシップ協定」千曲市と締結

4月26日、本学は千曲市との間で「産学官連携パートナーシップ協定」を締結しました。当日は学長・地域連携センター長・事務局長が出席し、千曲市からは近藤千曲市長・高松経済部長・渡島産業振興課長が出席しました。

これまでも同市との間では、教職員を対象とした千曲市見学会や清泉祭への出店を通じて、地域の産業、住民たちのまちづくり活動、観光地の視察と千曲市の実情に触れてきました。この「産学官連携

パートナーシップ協定」では、「信州千曲ブランド」の推進など産業振興に関すること、教育・文化の振興に関すること、人材育成に関すること、福祉の増進に関すること、地域の発展にかかる共同研究の推進に関することなど、本学は同市との連携を密にしながら地域づくりに積極的に取り組むこととしています。

初年度は、短大幼児教育科による「信州千曲ブランド」商品のモニター、国際コミュニケーション科によるアンズの摘果などフィールドワークの実施、人間学部現代コミュニケーションコースによる同市福祉施設の取材（現代基礎演習）等、様々な事業が動き始めています。

今後はこの協定を機会に、学生の皆さんがさらに地域に関心を持って大学生活を送ってほしいと思っています。



生涯学習

「故事成語」講座に参加して

上條 優子

ここ数年、公開講座の「故事成語」に参加しています。以前は、成語と聞くと、漢字四つで難しそうなイメージがあり、きつと私は覚えられないだろうと思っていました。実際に参加してみると、成語が成り立つに至った昔話、当時の時代背景、派生した現代の使い方を中国語と日本語とで習いながら、気がつくとその成語を自然に覚えてしまうという感じです。今回は、主人公たちの家系図と物語の中に出てきた歌も習いました。四字成語は、堅苦しい場面

で使うように思えますが、中国では日常的に使っているようです。今回の物語の中にも、いくつも成語があり、少ない字数

で多くの意味を伝えられる、とても便利な単語です。日中両国で共通のものもあれば、意味が少し異なるものもあります。今年の成語は、日本にないものでした。人生の先輩方と肩を並べ、毎回興味深い資料を準備してくださる張先生から学べるのもこの講座の魅力だと思っています。



特別企画講演会

「人生は8合目からおもしろい」

— 田部井淳子さん



5月26日、長野市内のホテルに登山家田部井淳子さんを招き、「人生は8合目からおもしろい」という講演会を開催しました。女性で初めてエベレストに登頂したことで知られている田部井さん、近年は中年の山歩き愛好者に人気があり、様々な活動に取り組んでいます。また福島県出身ということで、被災地の方々に山歩きを通じたサポートを行っています。

講演会では、エベレスト登頂の貴重な体験を当時の写真を見ながらうかがうことができました。さらに、被災された方々との山歩きのエピソードや、同世代の仲間とシャッソンを歌いコンサートまで行っている話をうかがい、常に前向きに生きる田部井さんの姿に会場の誰もが感動しました。

特別企画講演会は、本学が生涯学習事業として毎年5月に実施しているものですが、昨年は短大設立50周年事業と重なり、講演会は行われませんでした。2年ぶりとなった今年の講演会は、日程発表とともに反響が高く、3月末には予約がいっぱい。そのため、予約を断らざるを得ない状況になり、大変申し訳なく思っています。今後は講演会の円滑な運営を心がけ、地域の皆様の関心と期待に応えられるような講演会を企画していきたいと考えています。

ボランティア

今年度の東日本大震災復興支援

ボランティアプロジェクトが始動

昨年、岩手県大槌町を中心に展開された本学の「東日本大震災復興支援プロジェクト」を今年度も計画しています。震災から1年以上が経過し、災害時の記憶が薄れゆく今だからこそ、被災地の現実を直視しながら、今必要とされる支援を長期的な展望を視野に入れて行うことが何よりも大切だと考えています。

そんな中、去る5月29日、宮城県石巻市立門脇小学校の震災当日の様子を記録した長編ドキュメンタリー映画「3月11日を生き延びて」を学内で上映しました。かつて誰も体験したことのない大地の揺れと迫りくる大津波。そのとき学校現場の人々は、どう事態を判断し、どんな行動をとったのか。映画撮影に協力した門脇小学校の児童、教師、保護者50人を超える人々の証言から「人は3月11日をどのようにに生きたか」を痛切に感じるものができました。上映会には昨年、現地に足を運びボランティア活動を行った学生も参加し、あらためて被災地の人々のリアルな声に耳

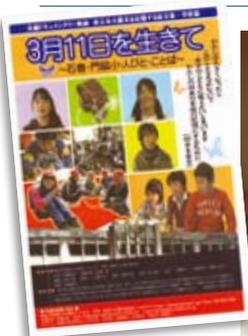
を傾けていたのが印象に残りました。

今後、ボランティア委員会では数回のボランティア研修会や「3月11日を生き延びて」を制作したドキュメンタリー映画監督・青池憲司氏を本学に招いて意見交換会も行います。またメインのボランティア活動として、8月～9月には子どもの笑顔を取り戻す活動（保育サポーター）や、環境保全活動（海岸清掃）なども行っていく予定です。

被災地の復興は一朝一夕に実現できるものではありません。私たちはこれからも被災地域の復興と心のケアを目指して、東日本大震災のサポートを続けていきたいと考えています。



ボランティア研修会



映画「3月11日を生き延びて」チラシ

たくさんの方の力をもらったボランティア体験

―長野市障害者スポーツ大会―

幼児教育科1年 百瀬 深



長野市障害者スポーツ大会

ボランティアスタッフとして障害者スポーツ大会に参加する前は、「障がいを持つ方々とのように接すればよいのか」「障害者スポーツ大会とはどんな大会なのだろうか」などといった不安と期待が入り混じった心境でした。しかし、そんな気持ちを吹き飛ばしてくれたのは選手の皆さんでした。障がいに負けず精一杯頑張る姿、私に向けられた笑顔など、すべてが私の中にパワーを与えてくれたように思えます。

今回、障害者スポーツ大会にボランティアスタッフとして参加でき、貴重な時間が過ごせ、とても良い経験をする事ができました。

国際交流

姉妹校ハニャン（漢陽）

女子大学の

受入れプログラム

19年目を迎える韓国ソウル市ハニャン（漢陽）女子大学日本語通訳科との交流プログラムは、例年通り受入れは6～7月に実施されました。学生29名と引率教員1名の短期プログラムは、日程の関係で本学キャンパス訪問は1日に限定されましたが、本学学生による夕食案内、善光寺参詣とそば打ちツアー、ゆかた着付と習字体験の日本文化講座、そして1泊の内容が盛りだくさんの内容でした。今年度から協定校受け入れが始まった台湾・高雄第一



ハニャン女子大学、高雄第一科技大学の学生がゆかたで記念撮影

科技大學學生10名と合同で行われました。



習字体験

長期プログラムは3名で、7月2日～30日の4週間長野に滞在しています。短大と学部から日本語学習に役立つ授業を毎日2～3コマ受講。課題をこなすとともに、本学学生と交流を深めました。小布施・地獄谷温泉の1日バスツアーのほか、オープンキャンパスへの参加、日韓料理パーティなどを体験。平日は聖心館に滞在、週末ホームステイの機会を数回得て、日本文化を直に味わいました。今回受け入れ学生のお世話を担当した野池杏子さん（国際コム2年、村田卒研セミナー）は「身近にお手伝いできるのを楽しみにしていました。授業や宿泊のサポートをしながら、たくさんのかつと一緒に体験できて本当に楽しかった」と話していました。

8月末からは1週間10数名の本学学生がハニャン女子大学を訪れる予定です。